地域貢献賞コーナー

日本放射線腫瘍学会（JASTRO）は、柄川 順 名誉会員からの寄付金を基に、会員の皆様の優れた貢献活動を讃えるため2022年に地域貢献賞を創設しました。

この賞の目的は、放射線治療の発展に寄与した優れた個人または団体の地域貢献活動を表彰することです。

地域貢献賞を受賞して

筑波メディカルセンター病院　放射線治療科　大城 佳子

現在勤務している病院では私と若手嘱託常勤医各1名体制で、1台のリニアックで600人を超える治療を行っています。そして高精度が1/3を占め、また半数を占める緩和照射は原則治療計画の翌日開始なので、スタッフの負担は大きいです。赴任当初は産休明けで放射線治療常勤医一人体制でした。そこからIMRTや新しいシステムを導入するに当たり、周囲の皆様に沢山助けられてきました。これまで当院では前立腺癌IMRTにおいてGrade 2以上の直腸出血は一件も生じていませんが、これには看護師さんが編み出した排泄日誌が大きく貢献しています。

米国留学の際にPhysicistの地位の高さを知りました。日本では医学物理士やそれに準じる職のインセンティブはありません。帰国後は彼らの重要性を院内上層部に訴え続けていますが現状を変えるのは難しく、キャリアアップに少しでも繋がることを期待して、微力ながら学術的な協力をしてきました。また数年前、当院に外勤に来ていた先生も含めた若手医師が辞めてしまいましたが、その兆候に何も気づけず、非常に残念な思いをしました。以降、当院で働く若手医師にもっと積極的に関わろうと思い、臨床の合間に彼らが抱えている研究の話をすることから始めました。それが成果に直結すると私も嬉しいですし、雑談の機会も増えました。普段の臨床では疑問に思うことはその都度解決することを心がけてきました。durvalumabの導入時には肺の線量制約が従来通りで良いか確信が持てず、県内多施設共同研究を主導しました[*1]。その際、筑波大学の先生により症例登録システムが整備され、以降も県内で多施設研究が行われるようになりました。そのうちに地域や近隣の医療関係者に講演させて頂く機会も増えてきました。

今回地域貢献賞に推薦して下さった櫻井英幸先生には心より感謝申し上げます。ただ、今回の受賞に際して『これを頑張った』という明確なものはなく、専門領域で特筆すべき業績があるわけでもありません。臨床の傍ら、その時に自分が必要と感じたことや興味を持ったことを進めてきただけです。それが今回、思いがけない形で認められたのは非常に嬉しく思います。また今年度、茨城県医師会勤務医学術奨励賞も頂き、県医師会に入会しました。今後も地域に根付いた臨床を行いつつ自らの研鑽に努めて参ります。そしてそれが少しでも共に働く仲間や地域の放射線治療のボトムアップに繋がり、地域医療の中で放射線治療の認知度向上に役立てば、幸せに思います。

*1 Oshiro Y, Mizumoto M, Sekino Y, et al. Clin Transl Radiat Oncol. 2021 29:54

今年度更新したリニアックと筑波メディカルセンターの放射線治療スタッフ。胡蝶蘭は受賞祝いに20年前の同僚から頂いたもの。